題名:無知公理―方程式数学―

副題:公理選択によるペアノ公理階層

著者:[吉見真一](Shinichi Yoshimi)
場所:[日本](沖縄県)
Email: akbfp443@me.com
ORCID: 0009-0008-8121-8947

日付: 2026 年 1 月 18 日

==================================

【本論文における記述ルール】

本論文では、論理構造と概念の定義を明確にするため、以下の記法と定義を採用する。

1. 括弧と強調
・【 】 : 章題、主題、大分類
・[ ] : 数式番号、引用番号、下位分類
・( ) : 補足説明、翻訳、略語定義、数式内の演算順序、集合
・≪ ≫ : 本論文で定義された記法・重要概念（全ての定義語に ID を付与）
・{ } : 概念の ID 番号（文脈によらず同一の定義であることを示す固定 ID）

2. 変数の定義と使い分け
本論文では、変数の大文字と小文字を以下の概念的差異に基づいて厳格に区別する。
大文字（A, B, M, K...）は、構造、定義、問題、あるいは「方向性を持つ概念そのもの」を示す。これらは計算前の枠組みや、公理空間そのものを指す記号として機能する。
小文字（a, b, k...）は、その構造に代入される具体的な解、要素、あるいは計算後の結果を示す。これらは代数的な操作の対象となる実体である。
この区別は、単なる数値の違いではなく、記号が持つ「役割（構造か要素か)」を明確にするための意図的な定義である。

==================================

【序論】

私は≪計算≫{016}や証明の体系（≪数学≫{004}）を提示しているのではなく、その体系が成立する以前の「定義の選択と同一視規則」によって公理空間を生成する枠組みを提示している。

【記法】

本論文は[≪定義存在学≫{032} 数学文法認知哲学と数学的理想主義の記法定義](https://doi.org/10.5281/zenodo.17785174)を基礎定義として用い、本論文独自の定義と統合して管理するが、本論文空間の≪定義≫{002}あり≪数学≫{004}との整合性を証明するものではない。

なぜなら、アカデミア体系において、≪数学≫{004}の≪定義≫{002}が一つではない事に対する解であり、≪数学≫{004}を≪定義≫{002}し言語化するための公理が≪無知公理≫{030}であるからである。

・≪存在≫{001}：定義された物。
・≪定義≫{002}：≪JIKAN≫{003}の差。
・≪JIKAN≫{003}（ジカン）：≪力学≫{023}を記述した数字。

・≪数学≫{004}：≪計算≫{016}を利用した≪定義≫{002}手法。
・≪哲学≫{005}：≪意識≫{017}を利用した≪定義≫{002}手法。
・≪言語≫{006}：≪記号≫{013}に認識を≪定義≫{002}した≪存在≫{001}

・≪ベロシティ≫{007}：≪方向≫{009}と≪順番≫{010}
・≪直線≫{008}：問題から解までの≪軌跡≫{012}
・≪方向≫{009}：回転の同一性の記述。（≪基準≫{014}以外）
・≪順番≫{010}：≪基準≫{014}からの時間のズレた≪点≫{015}
・≪集合≫{011}：≪方向≫{009}がない≪点≫{015}
・≪軌跡≫{012}：≪順番≫{010}を記述した≪記号≫{013}
・≪記号≫{013}：≪存在≫{001}の構造化。（物質と≪定義≫{002}することができる）

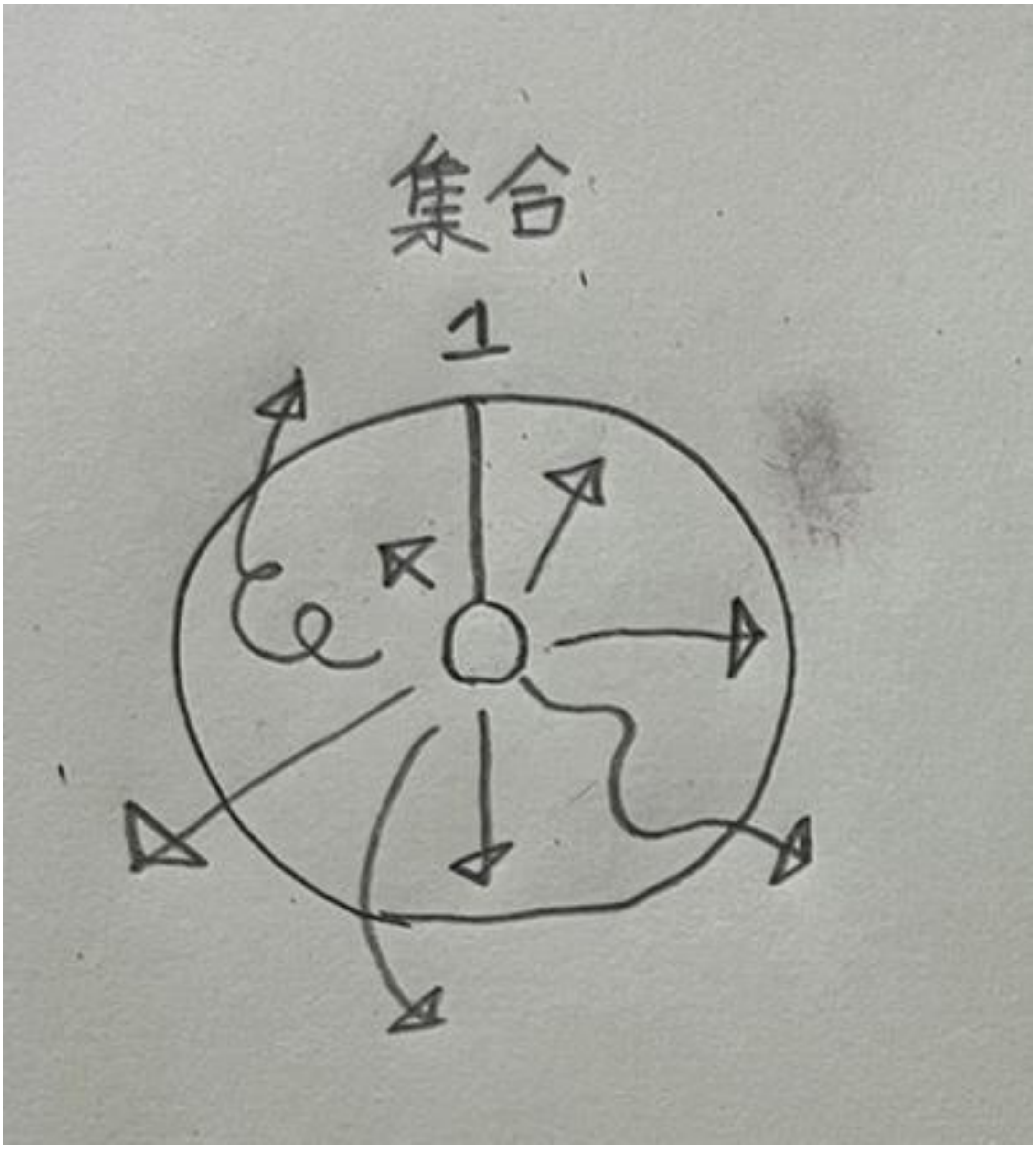
・≪基準≫{014}：≪定義≫{002}された≪点≫{015}
・≪点≫{015}：≪代数≫{018}
・≪計算≫{016}：≪記号≫{013}への≪代入≫{019}
・≪意識≫{017}：≪基準≫{014}の≪定義≫{002}
・≪代数≫{018}：≪記号≫{013}の≪意識≫{017}
・≪代入≫{019}：≪方向≫{009}の≪定義≫{002}

・≪0≫{020}：同一性のない数字。
・≪1≫{021}：≪0≫{020} 以外の全てを記述できる

・≪時間≫{022}：TIME の日本語訳・≪定義存在学≫{032}の≪力学≫{023}的記述（本論文では同一性を記述しない状態の記述には、日本語の主体による客観の変化を利用して記述する。）
・≪力学≫{023}：≪定義≫{002}による≪密度≫{024}差。

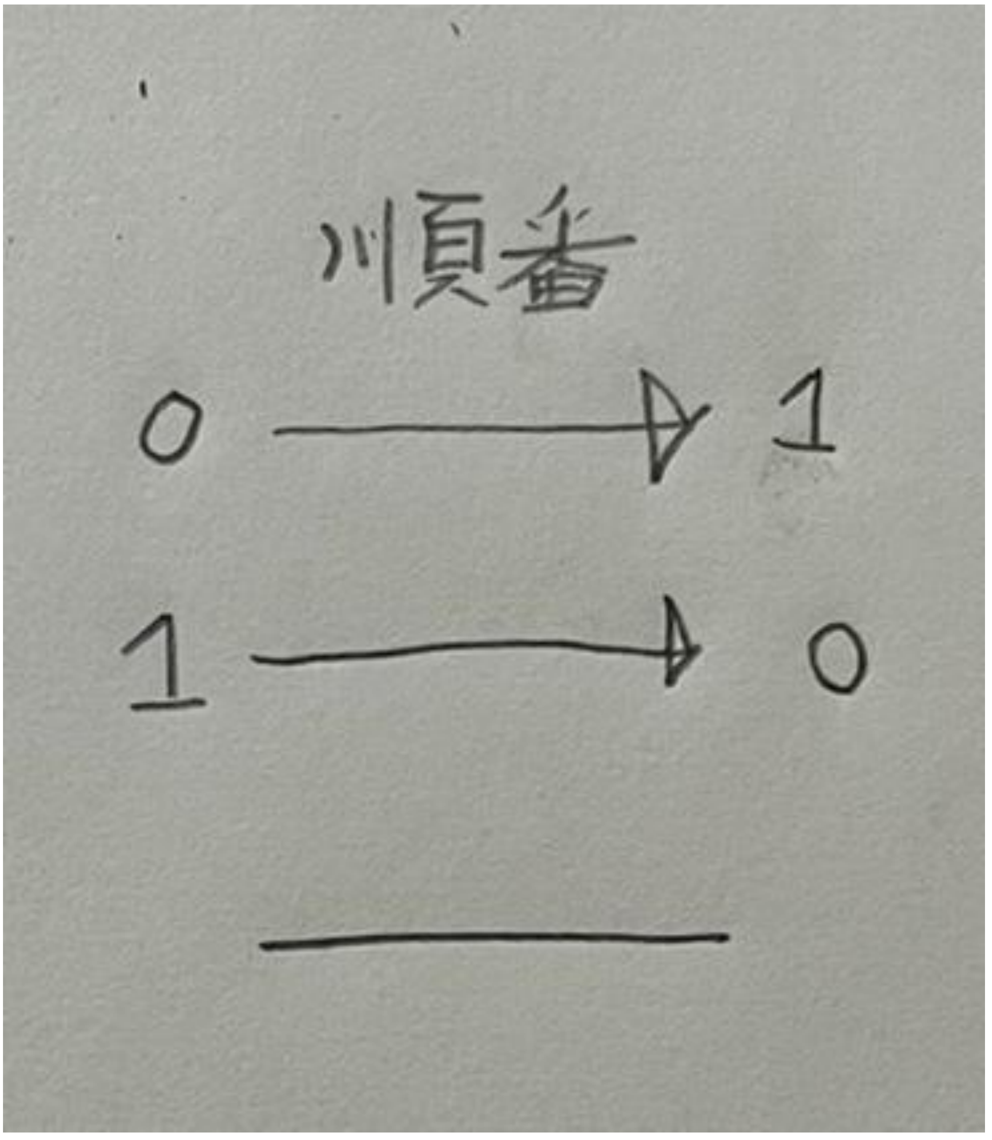
・≪状態≫{034}：≪存在≫{001}が認識し記述できる≪集合≫{011}体系。
・≪式≫{035}：≪記号≫{013}の関係性を記述した≪定義≫{002}。
・≪密度≫{024}：≪定義≫{002}と結果の≪力学≫{023}の記述。
・≪空間≫{025}：回転の≪集合≫{011}の≪存在≫{001}。
・≪加法≫{026}：≪0≫{020}から≪1≫{021}へ移動≪軌跡≫{012}
・≪減法≫{027}：≪1≫{021}から≪0≫{020}へ移動≪軌跡≫{012}
・≪乗法≫{028}：≪0≫{020}から≪1≫{021}へ移動≪集合≫{011}
・≪除法≫{029}：≪1≫{021}から≪0≫{020}へ移動≪集合≫{011}

【図解定義】



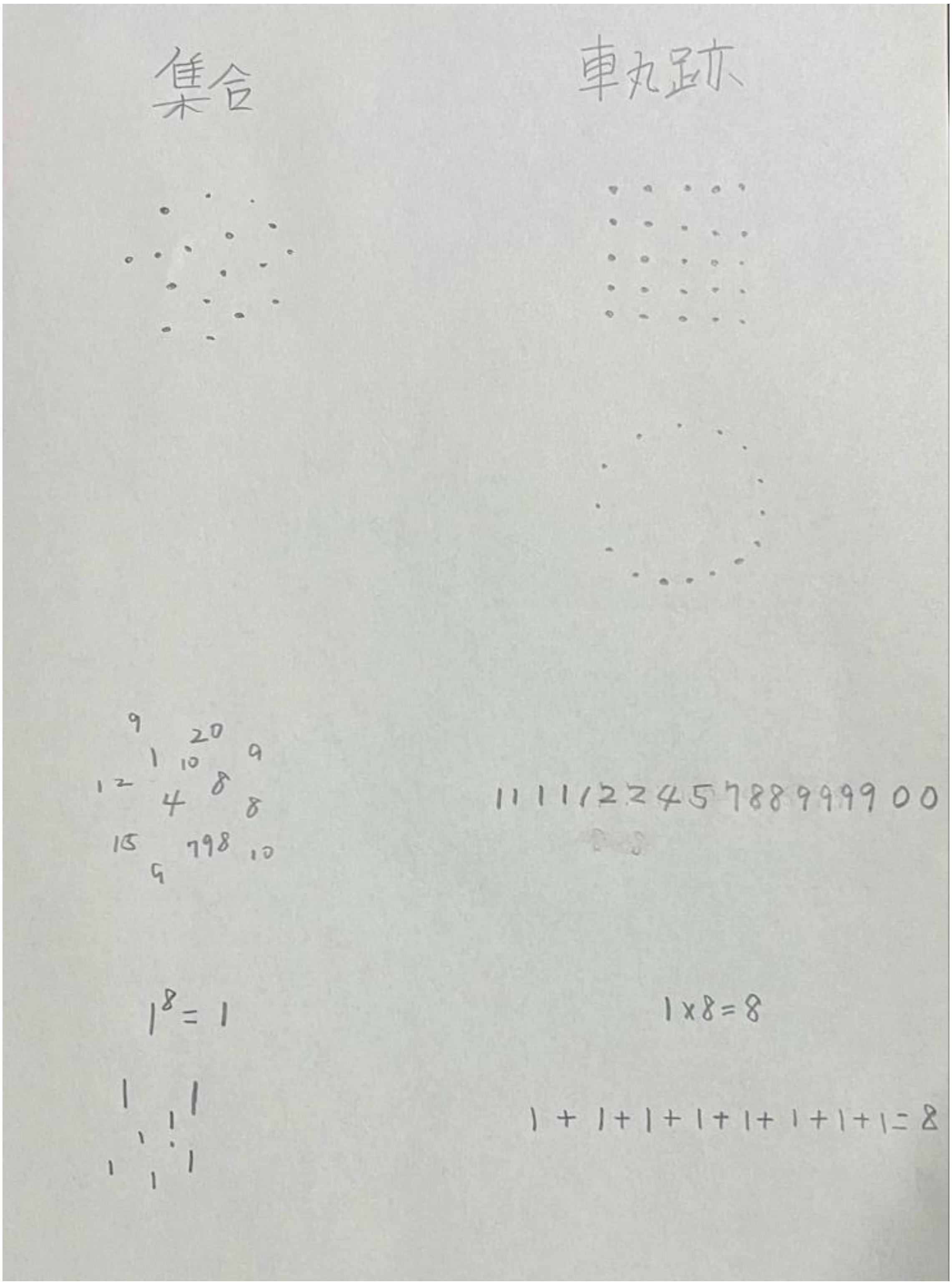
[図.1]

≪集合≫{011}の概念図 ≪数学≫{004}（ZFC やガロア理論）では≪定義≫{002}された対象を≪集合≫{011}とするが、本論文では≪数学≫{004}（ZFC やガロア理論）での≪定義≫{002}そのものを否定する。 ≪定義≫{002}とは「≪方向≫{009}」や「≪順番≫{010}」を与える行為であり、それが行われたものはもはや本論文で言う「≪集合≫{011}」ではないからである。



[図.2]

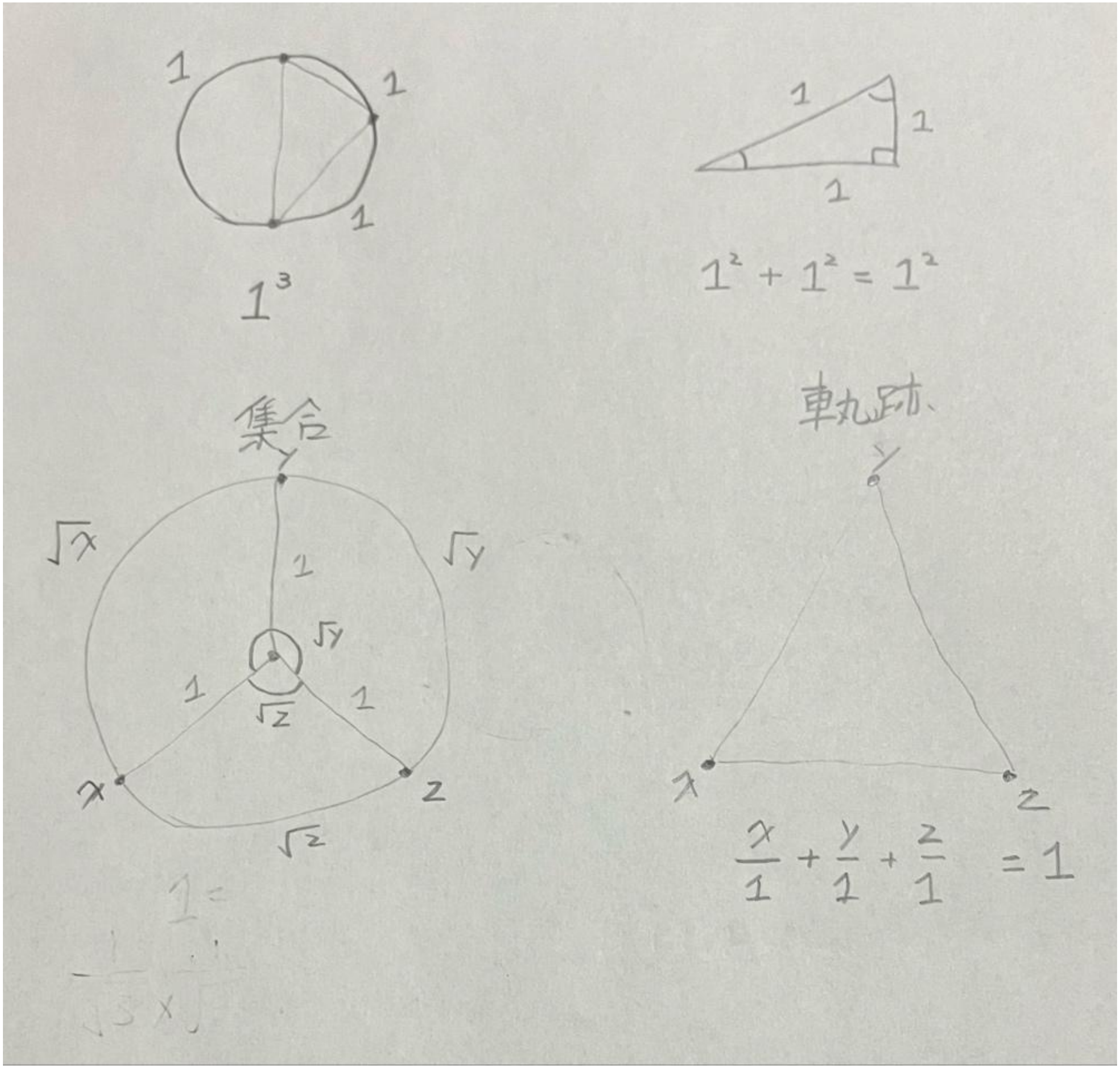
≪順番≫{010}の概念図 ≪順番≫{010}とは≪方向≫{009}がない限り≪順番≫{010}を≪定義≫{002}できない。図解することが≪軌跡≫{012}になっていると視覚的に理解できる。そして、重要なことは≪軌跡≫{012}は≪点≫{015}の≪集合≫{011}であるのだが、≪軌跡≫{012}として≪集合≫{011}するためには≪方向≫{009}が必要になる。

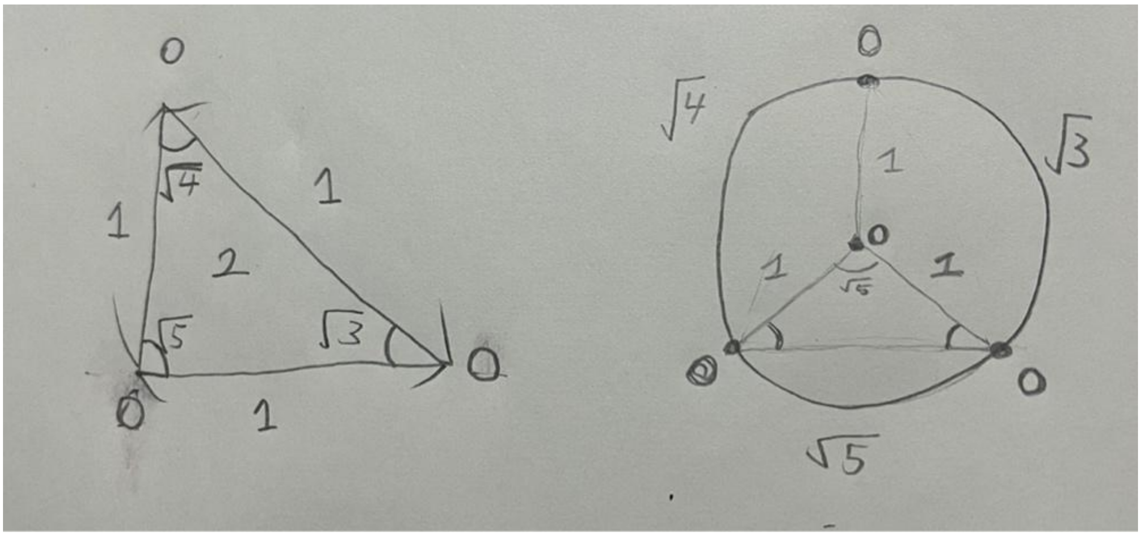


[図.3]

≪集合≫{011}と≪軌跡≫{012}の概念図 ≪集合≫{011}には閾値やゲージはあってはいけない。≪集合≫{011}を≪定義≫{002}せずに記述するには≪状態≫{034}を≪記号≫{013}化するしかない。 それは、赤ちゃんに名前を付けるようなもので、名前を付けたからと

言って運命が決まるわけではない事と同じである。 ≪軌跡≫{012}には幾何学や≪方程式≫{031}や角度などであらわされる。つまり、≪軌跡≫{012}はそれだけでは≪状態≫{034}がズレて記述されている。 そのズレが≪定義≫{002}の誤差を生むため≪無知公理≫{030}を≪定義≫{002}しない限り≪状態≫{034}を≪記号≫{013}化することはできない。





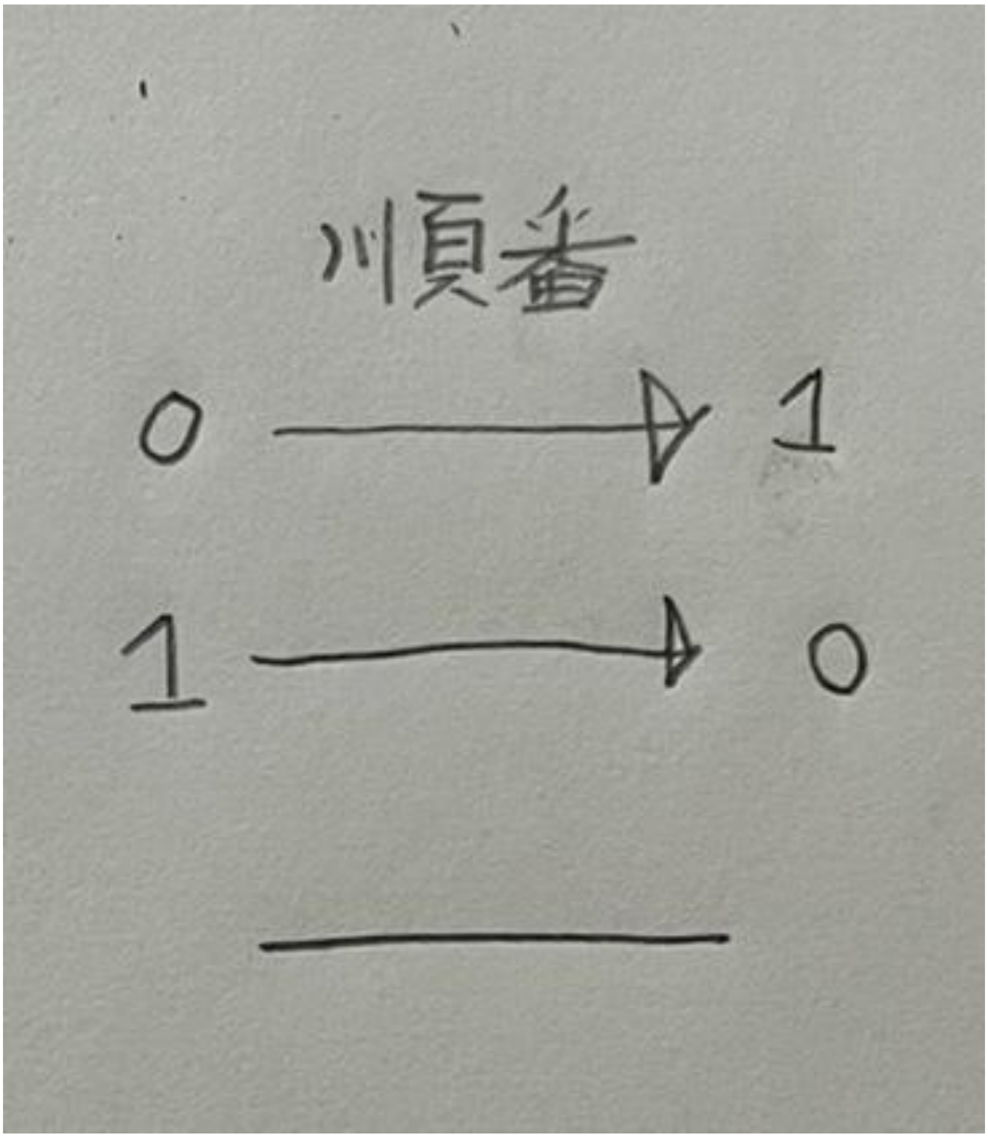
[図.4] [図.5]
整合性のない概念図 整合性がないが認識のとらえ方が≪集合≫{011}は円である。 ≪軌跡≫{012}は三角形である。 3 点の≪集合≫{011}を円と認識するのか三角形で認識するのかで≪数学≫{004}として数値化することを示している。円と認識するというのは楕円も含まれている。 必要なのは中心の角度である。 しかし三角形で≪軌跡≫{012}を≪集合≫{011}として認識してしまうと中心の角度は辺や面積や三角形の内角を≪計算≫{016}で求めることをしていることを感覚的に理解してもらいたい。 それが、≪数学≫{004}者が私の理論全般（シンイチ≪数学≫{004}体系）を整合性がないという理由であるが、まだこれを言語化する。

【≪無知公理≫{030}】

≪計算≫{016}は≪直線≫{008}の≪ベロシティ≫{007}を採用している。 つまり、≪点≫{015}は幾何学ではなく≪代数≫{018}である。

≪直線≫{008}の≪ベロシティ≫{007}は下記の≪計算≫{016}の≪状態≫{034}として≪式≫{035}にすることができる。
y=f(x)
x=y

つまり 1=0 の≪状態≫{034}と≪定義≫{002}できる
[図.2] を参照



本論文は無知公理による定義の基準を x=y∈z と記述する理論である

[例 1]
問題
1+1=3 の場合を答えよ

解
1+1=2 となるので間違え

≪無知公理≫{030}
1+1=2 である。

[例 2]
問題
『1+1=愛』の場合を答えよ

解
数字で表記出来ない

≪無知公理≫{030}
数字

[例 3]
問題
ペアノ公理（Peano axioms）は、自然数の構造を公理として与える体系です。形式化の仕方はいくつか流儀がありますが、典型的には「自然数の≪集合≫{011} N」「後者関数（後続関数） S」「初項 0」を基本記号として次を置きます。
Giuseppe Peano（ジュゼッペ・ペアノ）は後者を何だと≪定義≫{002}しましたかと言う問題は≪数学≫{004}ですか？
国語ですか？

答え
数字の後ろには数字があると≪定義≫{002}している。
と言う答えなら国語でも≪数学≫{004}でも正解する

結論
つまり≪数学≫{004}の≪定義≫{002}は数字を使わなくても≪数学≫{004}になる。と言う事がわかる

[例 4]
食塩水を蒸発させて無くすとどんな≪状態≫{034}になる。

解
≪数学≫{004}ではない

≪無知公理≫{030}
≪定義≫{002}忘れ
※食塩水を 100 と≪定義≫{002}すれば 0 が答えになる

[例 5]
c-b=

解
理解不能

≪無知公理≫{030}
≪言語≫{006}
※ペアノ公理で≪計算≫{016}するなら a

[例 6]
1+1=2

解
正解

≪無知公理≫{030}
理想の近似値

[例 7]
1 とは何か？

解
数字

≪無知公理≫{030}
≪代数≫{018}と≪定義≫{002}している。

[例 8]
≪代数≫{018}とは何か？

解
数字を≪代入≫{019}できる≪記号≫{013}

≪無知公理≫{030}
無限

[例 9]
数字とは何か？

解
1･2･3･4･5･6･7･8･9･0

≪無知公理≫{030}
≪言語≫{006}・文字・≪記号≫{013}

[例 10]
≪記号≫{013}とはなにか？

解
意味を持たせる印

≪無知公理≫{030}
≪方向≫{009}・方角・ベクトル

[例 11]
≪方向≫{009}とはなにか？

解
≪直線≫{008}の≪ベロシティ≫{007}が 0

≪無知公理≫{030}
≪0≫{020}の≪力学≫{023}

[例 12]
≪代数≫{018}に≪力学≫{023}は発生しているか？

解
≪代数≫{018}は何も持たない

≪無知公理≫{030}
≪代入≫{019}しなければいけない

[例 13]
≪代数≫{018}に≪代入≫{019}をする方法とは何か？

解
帰納法

≪無知公理≫{030}
≪順番≫{010}の≪定義≫{002}

[例 14]
≪順番≫{010}とはなにか？

解
1･2･3･4･5･6･7･8･9･10･11 と続いていく

≪無知公理≫{030}
≪直線≫{008}的な無限の≪定義≫{002}

[例 15]
1･2･5･9･4･52･7･2 は≪順番≫{010}か？

解
≪順番≫{010}ではない

≪無知公理≫{030}
≪順番≫{010}と≪定義≫{002}できる。

[例 16]
c-b=a の≪順番≫{010}は？

解
b･a･c もしくは a･b･c

≪無知公理≫{030}
-･＝は≪代数≫{018}
※ c･-･b･＝･a もしくは

[例 17]
＝･-には意味がありますか？

解
ある

≪無知公理≫{030}
ない

[例 18]
c-b=a は≪方程式≫{031}ですか・数式ですか・≪順番≫{010}ですか？

解
≪方程式≫{031}

≪無知公理≫{030}
≪言語≫{006}

[例 19]
c-b=a はどういう≪定義≫{002}ができますか？

解
≪集合≫{011}している≪状態≫{034}

≪無知公理≫{030}
≪0≫{020}に≪集合≫{011}を≪代入≫{019}している

【≪数学≫{004}をする】

≪方程式数学≫{031}とは≪記号≫{013}に≪言語≫{006}を≪代入≫{019}し≪記号≫{013}の≪集合≫{011}の≪方向≫{009}性を揃える方法である。

よって
[例 1]〜[19]より示されている、≪無知公理≫{030}の≪言語≫{006}を≪記号≫{013}として≪代入≫{019}し≪定義≫{002}する。

≪無知公理≫{030}を 0 に≪代入≫{019}する
等しいを=に≪代入≫{019}する
証明を 1 に≪代入≫{019}する

=01 は≪集合≫{011}となる。

=01 では≪数学≫{004}にはなり得ない。
≪順番≫{010}を≪定義≫{002}したら=01 は≪数学≫{004}となる。

【≪無知公理≫{030}の≪数学≫{004}】

M に≪無知公理≫{030}を≪代入≫{019}する
K に公理を≪代入≫{019}する
k に解を≪代入≫{019}する
H に等しいを≪代入≫{019}する
B に≪方向≫{009}を≪代入≫{019}する

≪集合≫{011}を（ ）とする。

(K H Bk）は公理と解の≪方向≫{009}が等しいという≪集合≫{011}となる。

(K H Bk）を A に≪代入≫{019}する

(M A H)にはなるかもしれないが(M A BH)にはならない。

であるなら
(M A KkH)にはなるかもしれないが(M A BKkH)にはならない。

何故なら（M K)は≪無知公理≫{030}と公理の≪集合≫{011}を意味する。
つまり、≪無知公理≫{030}の公理の≪状態≫{034}か公理の≪無知公理≫{030}の≪状態≫{034}である。

(M k)も同様である。

であるなら(M A KkH)は A に B が≪代入≫{019}されていなければよいので(K H k M)となる。

よって≪無知公理≫{030}は公理と解が≪方向≫{009}を持たない等しさである。
つまり≪方向≫{009}のない公理と≪定義≫{002}できる。

【≪加法≫{026}≪集合≫{011}と≪乗法≫{028}≪集合≫{011}の≪数学≫{004}性】

≪無知公理≫{030}（≪方程式数学≫{031}）の≪定義≫{002}において
数字は≪0≫{020}･≪1≫{021}のみである。

≪加法≫{026}≪集合≫{011}
(1+1=)
≪乗法≫{028}≪集合≫{011}
(1×1=)

≪集合≫{011}という≪定義≫{002}
≪集合≫{011}：≪定義≫{002}が≪基準≫{014}になる。（≪方向≫{009}がない≪点≫{015}）をしているが

≪加法≫{026}≪集合≫{011}と≪乗法≫{028}≪集合≫{011}はどちらが適切な≪集合≫{011}なのかは記述と認識で証明される。

≪加法≫{026}≪集合≫{011}(1+1=)に≪順番≫{010}を持たせず記述した≪記号≫{013}とする。

≪乗法≫{028}≪集合≫{011}(1×1=)に≪順番≫{010}を持たせず記述した≪記号≫{013}とする。

どちらも≪記号≫{013}の≪集合≫{011}ではあるが、≪集合≫{011}と四則演算が一致しているのはどちらか？

では
(2×2=)と（2+2=）の≪集合≫{011}はどうなるのか？

どちらも≪集合≫{011}にはなりえない。
(1+1=2)を≪集合≫{011}と≪定義≫{002}しているため
(2×2=4)
(2+2=4)という≪集合≫{011}が生まれる。

2×2=2 でなければ≪集合≫{011}とはなりえない

しかし、
(4=2×2･4×1･1×4)
(4=1+3･2+2･3+1)という≪集合≫{011}が生まれる。

なぜ≪集合≫{011}なのに再現性がないのか？
それは、≪集合≫{011}に≪1≫{021}が内包されているからである。

よって
≪乗法≫{028}≪集合≫{011}から≪加法≫{026}≪集合≫{011}を排除すると≪集合≫{011}となる
どういうことかというと論文の≪定義≫{002}では≪1≫{021}とは≪0≫{020}以外のすべての数字である。
つまり≪集合≫{011}に≪1≫{021}を入れてしまうと≪集合≫{011}と同じ記述になるため≪集合≫{011}構造の≪点≫{015}を認識できない。

≪数学≫{004}的には≪乗法≫{028}≪集合≫{011}から≪加法≫{026}≪集合≫{011}を排除することが≪集合≫{011}であると≪定義≫{002}できる。
つまり、≪集合≫{011}とは≪0≫{020}と同一構造である

つまり、≪集合≫{011}は≪無知公理≫{030}と同一構造となるので

≪方程式数学≫{031}では≪集合≫{011}・≪無知公理≫{030}を≪0≫{020}と≪定義≫{002}する。

備考として
≪加法≫{026}≪集合≫{011}と≪定義≫{002}したが≪加法≫{026}≪集合≫{011}ではなく≪加法≫{026}≪軌跡≫{012}とし≪軌跡≫{012}は≪直線≫{008}と≪定義≫{002}することができる。

【≪何向定理≫{033}（ムンテイリ）】

公理を≪1≫{021}と≪定義≫{002}する
≪無知公理≫{030}を≪0≫{020}と≪定義≫{002}する
問題を M と≪定義≫{002}
解を k と≪定義≫{002}

≪集合≫{011}
1>(Mk)

(Mk)Ξ0

(1>Mk)=(MKΞ0)
(1>)=(Ξ0)

つまり 0=0 は必ず 1 以下であるという事になる

0=0 が 1 だとおそらくそれは 0 なんだっていう≪無知公理≫{030}が生まれる（笑）

0=0 が 1 だからシンイチ≪数学≫{004}の公理は√1=0 の時の≪無知公理≫{030}は 1>0 ってこと

【≪何向定理≫{033}（ムンテイリ）の≪計算≫{016}方法】

≪記号≫{013}の≪集合≫{011}と排除

≪集合≫{011}を（ ）とする

≪記号≫{013}を≪集合≫{011}として一つにまとめ=の≪記号≫{013}で排除する

(AB+CD)(ABCD)の 2 つの≪集合≫{011}があるこれだとわかりづらいが
(12+34)=(1234)だとわかりやすい

(12+34)=(1234)にはならない

その原因は≪加法≫{026}（+）が≪集合≫{011}に入っているから

しかし(1×2×3×4)=(1234)にはなる
なぜなら≪乗法≫{028}は≪集合≫{011}と同じ意味だからである。

つまり 1×2×3×4=24

(24)=(1234)となり 1234 は 24 と同じ意味となりえる。

1234 を 4 桁の数字だとする場合は 1000×1+100×2+10×3+4 という形で≪加法≫{026}が入っているため
≪何向定理≫{033}とはならない。

(12+3)=(1234)とする場合 4 が+であれば同じ意味となる
(+)=(4)の場合(12+3)=(1234)であると≪定義≫{002}することができる。

つまり≪何向定理≫{033}は≪定義≫{002}するための≪集合≫{011}であり必ず≪無知公理≫{030}があるから≪集合≫{011}の≪計算≫{016}ができることが証明されている。

【≪無知公理≫{030}への反証への解答】

[重要命題]
リンゴ 1 個が机の上にあります。リンゴ 1 個が木にぶら下がってます。果物は何個ありますか？

答えは現代≪数学≫{004}では解けない。

何故ならこの問題の解は

解
1+1=2
よって果物 2 個

≪無知公理≫{030}
リンゴは果物ではない

【≪無知公理≫{030}への反証への解答の結論】

≪定義≫{002}とは誰でもできるし誰が採用しても良い。
≪無知公理≫{030}の≪定義≫{002}も同様である。

それが何の意味があるのか？

公理≪空間≫{025}の証明を≪無知公理≫{030}が証明している。
問題の解を生む公理体系以外の≪無知公理≫{030}を≪定義≫{002}しない限り問題と解は証明されない。

リンゴを 1 個と≪定義≫{002}しない限りリンゴは加算できない。
しかしジョナゴールドがリンゴだと知らない人はリンゴを加算できない。
つまり、≪数学≫{004}は≪定義≫{002}を公理として放棄している。

何故なら、それはリンゴを数えるために≪数学≫{004}が無いと言っているのと同じ事である。

木にぶら下がっているリンゴは果たしてリンゴだろうか？リンゴの木だろうか？
机の上にあるリンゴは昨日見た木にぶら下がっているリンゴかもしれない。

ただ、果物として≪計算≫{016}するなら≪数学≫{004}的には 2 だろう。
何故なら問題はリンゴは何個だと≪定義≫{002}していない。

果物は何個ありますかだから
果物の概念を 2 個抽出すれば良い。

でもだ、問題がリンゴ何個ですか？だったら
≪無知公理≫{030}が無ければこの問題は解けない。

何故なら
果物としては 2 個。そして≪無知公理≫{030}はリンゴが果物ではない。
この問題≪空間≫{025}においてリンゴは 1 個というのが解となり、≪無知公理≫{030}は机の上にはリンゴは無い

≪数学≫{004}は数の≪計算≫{016}はしているが、数を≪定義≫{002}する方法を持っていない。
何故なら数には何も持たせていないという理論だからである。

しかし、数を使う人間が勝手に≪方向≫{009}を持たせている。
逆に言えは≪方向≫{009}を持たせなければ≪数学≫{004}は何も意味のない物である。

上記の問題でリンゴ 2 個だと答えるのは≪数学≫{004}ではなく≪哲学≫{005}となる。
≪数学≫{004}者がそれでも良いというか言わないかだけの問題である。

リンゴは全て同じではない。
昨日食べたリンゴと今日食べたリンゴの違いを≪数学≫{004}で証明したくないのであれば≪無知公理≫{030}は忘れてください。

公理≪空間≫{025}で勝手に楽しめば良いじゃない。

【何でもあり】

何でもありでなければ帰納法は成立しない。
≪代数≫{018}に≪代入≫{019}するのは≪代数≫{018}を関数で≪定義≫{002}しているからである。

であるなら、≪数学≫{004}は帰納法すら廃止しなければならない。

【≪方程式数学≫{031}の≪無知公理≫{030}の形式化】

問題・解の名詞をすべて≪記号≫{013}として抜き出す。
≪記号≫{013}として抜き出す場合に名詞の頭文字をひらがなで記述する
（ ）は≪集合≫{011}とする
( )で囲まれた名詞の頭文字は≪定義≫{002}の≪集合≫{011}となる。

名詞の頭文字は≪記号≫{013}となる。

[重要命題]
リンゴ1個が机の上にあります。リンゴ1個が木にぶら下がってます。果物は何個ありますか？

リンゴ=(り)
数字=(す)
個=(こ)
机=(つ)
木=(き)
果物=(く)

(りつきくすこ)

[解]
1+1=2
よって果物2個

(すくこ)

[≪無知公理≫{030}]
(りつきくすこ)=(すくこ)により
数字=(す)果物=(く)個=(こ)を否定する

※(りつきくすこ)=(すくこ)は問題と解が結ばれている≪状態≫{034}である。
この≪状態≫{034}を数値化するために採用される≪集合≫{011}が(す)(く)(こ)であり、これらを否定することが≪無知公理≫{030}となる。

『リンゴは果物ではない』は数字=(す)果物=(く)個=(こ)の否定に含まれているため≪無知公理≫{030}になりえる。

問題は≪何向定理≫{033}では公理となり≪無知公理≫{030}は≪0≫{020}となる

重要命題の『リンゴは果物ではない』という≪無知公理≫{030}は完全な≪無知公理≫{030}ではない。

完全な≪無知公理≫{030}は(りつきくすこ)の否定となるが、これを否定すると解も≪存在≫{001}しなくなる。

よって≪無知公理≫{030}に含まれない≪定義≫{002}を否定しても≪無知公理≫{030}は成立しないことになる。

【結論】

解を作る方法は≪方向≫{009}性を持っている（理解）
問題と同じ≪定義≫{002}をすることが≪数学≫{004}となる。
逆に言えば≪方向≫{009}性を持っていれば全て≪数学≫{004}にできる。
つまり、≪数学≫{004}とは証明をする事ではなく≪計算≫{016}をする事でもなく。≪計算≫{016}と証明の≪方向≫{009}性を揃える学問である。

≪無知公理≫{030}を公理とした学問を≪数学≫{004}体系の中で≪何向定理≫{033}（ムンテイリ）と≪定義≫{002}する。

≪何向定理≫{033}とは、帰納法として≪0≫{020}の代わりに≪1≫{021}を≪代入≫{019}する事で公理を生成する方法で≪集合≫{011}を導き出す定理

≪何向定理≫{033}の数字≪定義≫{002}
≪0≫{020}：同一性のない数字。
≪1≫{021}：≪0≫{020} 以外の全てを記述できる

よって
≪方程式数学≫{031}では
≪定義≫{002}の帰納法による公理の生成により≪無知公理≫{030}が解となるため

≪何向定理≫{033} -> ムンテイリ -> 「0」（≪0≫{020}）が証明できる。

【重要結論】

≪無知公理≫{030}で全ては≪数学≫{004}になりうる。
≪方向≫{009}性は、その≪数学≫{004}を学校や共同体で運用するための規格である。

≪方程式数学≫{031}では≪無知公理≫{030}を公理とすることで

$\sqrt{1}=0$ も X=Y も 2=3 も≪状態≫{034}と≪定義≫{002}することができる。

※≪状態≫{034}：≪存在≫{001}が認識し記述できる≪集合≫{011}体系。

(1+1=2)の≪集合≫{011}と（2=3）の≪集合≫{011}の同一性の部分を抽出して証明することもできる。

つまり 2=3 を偽とするのは(1+1=2)の≪集合≫{011}体だからであり

≪数学≫{004}において 1+1=2 を解にするのか 2 を解にするのかを区別しなければならない。
これは ZFC を包括する≪集合≫{011}論となり≪数学≫{004}の基盤に位置する。

≪数学≫{004}的形式化の結論
本論文は概念を説明するための論文であり証明するために記述していない。
≪無知公理≫{030}があることで問題と解が≪集合≫{011}となるという事を説明した。

≪無知公理≫{030}で全ては≪数学≫{004}になりうる。≪方向≫{009}性は、その≪数学≫{004}を学校や共同体で運用するための規格である。

【付録.1】

ユークリッド幾何学は非ユークリッド幾何学により公理≪空間≫{025}を証明している。

しかし、≪記号≫{013}≪空間≫{025}（≪定義≫{002}）は≪数学≫{004}において原論にすらなっていない。
言うなれば
本論の≪定義≫{002}した≪0≫{020}･≪1≫{021}をシンイチ記何学とし非シンイチ記何学を≪無知公理≫{030}とする事をオススメする。

ただし、コレはあくまでも本論文の≪空間≫{025}≪定義≫{002}なので何でもありである。

しかし、コレを利用しなければ宇宙と≪意識≫{017}は解析できない。

だから、本論文は≪数学≫{004}の歴史としてユークリッド幾何学から非ユークリッド幾何

学を採用したのと相似である。

その確率は、100%である。

この論文≪空間≫{025}の≪無知公理≫{030}は
【読者がいない】

【付録.2】

本論文は理論である。
ユークリッドが原論を書いたように、20 世紀の≪数学≫{004}を誰かがまとめなければ
≪数学≫{004}は何をする学問なのかが全く分からない≪状態≫{034}になってしまう。

それは、≪式≫{035}を使わず≪言語≫{006}として≪数学≫{004}をしていた 16 世紀のフェルマーやパスカル・ニュートン・ライプニッツのように≪数学≫{004}という学術の≪定義≫{002}が多言語化している。

本論文の革新性は≪定義≫{002}を≪式≫{035}にする理論であるという事である。
その方法論は書いていないが、≪方程式数学≫{031}の枠組みの中で≪無知公理≫{030}を公理とする論文≪空間≫{025}を≪数学≫{004}的学術の≪計算≫{016}であるとしている。

≪方程式数学≫{031}基礎（ https://zenodo.org/records/18102417 ）の論文で[公理証明記号順序式]と≪定義≫{002}しているが

[公理証明記号順序式]
x=y∈z
(x･y･z は≪記号≫{013}とし、=･∈は≪式≫{035}とする)

x=y∈z この≪式≫{035}こそが≪無知公理≫{030}による≪定義≫{002}を≪式≫{035}にした形である。

つまり、≪定義≫{002}を≪方程式≫{031}にすることでガロア理論・ZFC・ペアノ公理など≪数学≫{004}の公理はすべて x=y∈z の形で≪定義≫{002}することができる。

この≪式≫{035}の作り方については本論文では記述しないが
本論文の理論が何のために書かれているかを言うならば x=y∈z の意味を提示している。

【付録.3】

本論文は≪数学≫{004}としての論文であり、≪哲学≫{005}（≪定義存在学≫{032}）としては別論文として≪無知公理≫{030}について記述しているので合わせて読むことをすすめる。

【付録.4】

本論文は≪数学≫{004}としての論文であり、≪哲学≫{005}（≪定義存在学≫{032}）としては別論文として≪無知公理≫{030}について記述しているので合わせて読むことをすすめる。